



～地域包括ケア病棟から地域をデザインする～

発行元：地域包括ケア病棟“彩り”・リハビリ科・地域医療連携室

地域包括ケア病棟“彩り”で受け入れした事例の紹介(第44回)

～他病院・他施設で受け入れ困難な患者さんを受け入れました～

脳性麻痺の後遺症で発語ができず、お姉様がコミュニケーションを取りながら長年在宅介護をしてこられた患者さんです。数年前に両下肢が脱力してから、立ち上がりや歩行、長時間の座位保持ができず、床を這って生活しておられます。そのため、ベッド生活はできません。食事は四つん這いの姿勢で食べておられます。

お姉様が約2週間自宅を離れることになり、担当ケアマネジャーがその間泊まりで利用できる介護施設や医療機関をいくつも探されましたが、どちらも受け入れが難しいとのことで、当院に入院相談がありました。介護施設は、共用スペースの床で、四つん這いで食事をしていただくわけにはいかず個室での食事となりますが、人手不足のためマンツーマンで食事介助を行うことができないため受け入れが難しいとのことでした。また、医療機関は、原則ベッド生活のため受け入れが難しいとのことだったそうです。

入院希望日まで日がなかったため、電話口でいただいた介護情報などをもとに、地域包括ケア病棟“彩り”の吉崎看護師長とどのように入院生活を送っていただくか相談し、環境調整を行いました。病室の床にベッドマットを複数枚敷き、寝転がって病院生活を送っていただけるようにしました。入院当日、ご本人、お姉様に病室を確認してもらい、最終調整を行いました。

入院後、日中は病室で機嫌良く過ごしておられ、夜間もよく眠っておられます。少しずつではありますが、看護師ともジェスチャーでコミュニケーションが取れる場面もあります。

お姉様から離れて過ごされることは初めてとのことですが、病院生活がうまくいけば、定期的にご利用したいとの希望をいただいています。

他病院・他施設で受け入れ困難な方も、可能な限り受け入れできるよう調整いたしますので、ご希望があればお気軽にご相談ください。(地域医療連携室 ソーシャルワーカー 松田 辰基)

～年末年始の受け入れについて～

～お気軽にお問い合わせ下さい～

例年のこととなりますが、年末年始も地域包括ケア病棟“彩り”では、患者さんの受け入れを行っております。先生方の休暇やご家族のご都合により一時的に在宅医療・介護が途切れる場合などにご利用下さい。ベッド調整などの都合もありますので、あらかじめ予定がおわかりの場合にはお早めにご連絡頂けると幸いです。(南出)

*

0774-73-1818 (担当：中野・中嶋・松田)

昨年は、7名の患者さんを受け入れさせて頂きました。



老健やましろより

～ 100歳のお祝いをしました ～



9月16日は敬老の日でした。敬老の日は「多年にわたり社会に尽くしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う」日とされ、1947年、兵庫県多可郡野間谷村で村主催の「敬老会」を開催したのが始まりであるといわれています。

当施設には現在、92人の入所者様が入所されており、その平均年齢は、平成19年の施設開設当時の85.28歳から年々上がり、現在は88.58歳となっています。また、入所者様の50%の46名が90歳以上となるなど、日本国内と同様に施設の中も高齢化が進んでいます。



当施設には、今年、数え年で100歳のご利用者様がいらっしゃいます。歩行器を使用してご自身でしっかりと歩かれ、100歳とは思えないくらいお元気です。9月20日(金)、京都府山城南保健所と木津川市役所の職員の方が、100歳のお祝いの表彰状と記念品の贈呈にられました。この日は、ご家族様(息子様ご夫婦、お孫さん、ひ孫さんまで総勢6名)も来所され、スタッフも含め、みなでお祝いの

セレモニーを行いました。まだ小さなひ孫さんも表彰状授与の様子を、スマホを使って上手に撮影されたり、元学校の先生だったご利用者様にちなんで、みんなで『めだかの学校』を合唱するなど、なごやかで楽しいセレモニーとなりました。これからもまだまだお元気で楽しい毎日をご過ごしていただきたいと思います。(老健やましろ 管理部長 三村 裕子)

地域医療連携室より

～ Over The Rainbow ～

Heartbreaking moment girl, 5, takes care of little brother with leukaemia



「白血病を患っている弟を看病する5歳の少女の悲痛な瞬間」とキャプションがつけられた写真です。治療の合間に一時帰宅した際、母親によって撮影されたそうです。皆さんはこの写真を見てどのようなこととお感じでしょうか。ご自身のお子さんやお孫さんと重ねて、あるいは、以前関わりのあった患者さんのことを思い出されるかもしれません。



私はこの写真を見て、胸が締め付けられる思いがしました。私は20年程前に白血病を患い、骨髄バンクのドナーから骨髄の提供を受けていますが、私はこの写真を見て、看病している5歳の少女が、私の2歳年上の兄と重なったからです。

当時、兄は東京に住んでいましたが、後になり義姉から聞いた話では、兄が私の病気のことを両親から電話で聞いたとき、混乱していたようです。また、闘病生活中の私を不憫に思い、「我慢せんとわがまま言ったらいいんや」と兄なりの方法で励ましてくれました。この写真を見ながらそんなことを思い出しました。



写真の男の子はしばらく治療が必要とのことですが、医師や看護師を信じ、ご家族の支えで治療を乗り切りたいと思います。そして、様々なご病気で闘病されているすべての患者さんが元気になられることを心から願ってやみません。(地域医連携室 室長 南出 弦)